
《500文字小説》記憶が呼び覚ますもの

十司 紗奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《500文字小説》 記憶が呼び覚ますもの

【Nコード】

N5573S

【作者名】

十司 紗奈

【あらすじ】

ある事を切っ掛けに、突然思い出した記憶。それが隠されていた事実を暴き出す物語。

朝、学校へ行こうと家を出た時、思いがけないものを見た。それは車にはねられた猫の姿。吐き気がする程怖いのに、僕は目を離せなかった。

「何を見ているんだ」

叱るような声に振り返ると、両親が薄気味悪そうに僕を見ていた。僕がもつと小さかった頃、パパはいつも家にいた気がする。その朝、何故か思い出したのは、夏の夕暮れ、畳の上で大の字になつてゐるパパの姿。でも、それ以降は忙しくなつて、あまり家にいなくなつた。けれど今のパパより、昔のほうが好きだつた。

学校から帰ると、僕は隣町のお祖母ちゃんの家へ遊びに行った。

ママが僕を変な目で見るのが、気に入らなかつたから。

「お父さんそつくりになつたね」

「皆は、ちつとも似てないつていうよ」

お祖母ちゃんは、ちらつと僕を見ると、ポツポツと話してくれた。

僕のパパは亡くなつたのだ、と。

「お前が三歳の夏にね。身体を壊していたんだけど、急に。それからお母さんは再婚したの。……もつとも前からの知り合いだつたよ
うだけど」

最後の一言を、お祖母ちゃんは吐き捨てるように言った。けれど、夏という言葉に、僕の手は震えた。今日、唐突に思い出した記憶。それが何を意味するのか、わかつてしまったから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5573s/>

《500文字小説》記憶が呼び覚ますもの

2011年10月8日19時21分発行